

夜尿症患者における在胎週数および出生体重の検討

著者	西? 直人, 田所 愛弓, 海野 大輔, 平野 大志, 大日方 薫, 大友 義之, 東海林 宏道, 清水 俊明
雑誌名	DOHaD研究
巻	6
号	1
ページ	63-63
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/10271/3274

夜尿症患者における在胎週数および出生体重の検討

○西崎直人¹⁾、田所愛弓²⁾、海野大輔³⁾、平野大志⁴⁾、大日方薫¹⁾、
大友義之³⁾、東海林宏道⁵⁾、清水俊明⁵⁾

順天堂大学医学部附属浦安病院小児科¹⁾、順天堂大学医学部附属静岡
病院小児科²⁾、順天堂大学医学部附属練馬病院小児科³⁾、東京慈恵会
医科大学小児科⁴⁾、順天堂大学医学部小児科⁵⁾

【背景】夜尿症 (NE) の原因は多岐にわたるが、その一因として「発達の遅れ」の関与が想定されている。これまで NE と周産期要因について検討された報告は少ないが、周産期領域では late preterm (LP ; 後期早産) 児の発達予後を含めた成長後の問題点が近年注目されている。

【目的】NE 患者における①低出生体重 (LBW) 児・早産児・LP 児の割合を調査する、②LBW 児について LP で出生した児と正期産 (≥37 週) で出生した児の NE の臨床像を比較する、③LP 児について LBW 児と正常体重児 (≥2,500g) の NE の臨床像を比較する。

【方法】2014 年 1 月から 2 年間に附属 3 病院を受診した一次性 NE 児 614 名。データ不備を除いた 544 名 [男児 354 名, 受診時年齢 (中央値, 範囲) 8 歳 (5-15), 平均在胎週数 38.7±1.9 週, 出生体重 (中央値, 範囲) 2,990g (692-4,330)] を解析対象とした。統計は χ^2 乗検定および t 検定を用い、 $p<0.05$ を有意差ありとした。

【結果】LBW 児・早産児・LP 児の割合はそれぞれ 77 名 (14.1%)・40 名 (7.9%)・30 名 (5.5%) と既報とほぼ同様であった。LBW 児のうち LP 児は 18 名 (23.4) %, 早産児のうち LP 児は 30 名 (75%) であった。LBW 児を正期産児 48 名と LP 児 18 名の 2 群間で比較したところ、初診時の NE 日数 (/月) は LP 児群で有意に多かった (17.2 vs 22.6, $p=0.048$)。

【考察】NE 患者中の LBW 児の割合は既報とほぼ同様であった。また LBW 児の中でも LP 児の方が正期産児より初診時夜尿日数が多かった。LP 児は脳性麻痺や発達遅滞のリスクが高く、学校教育における問題発生リスクも高いことが報告されている。一方で発達障害のある NE 患者では排尿に対する意識の低さや尿意への感覚鈍麻が関連しているとの報告もある。

【結論】LBW 児や LP 児の発達を評価する際には NE との関連も考慮しながらアプローチする必要があると考える。